

「下村満子の生き方塾」ニュース

Vol.12 2017.08.

—小泉元総理特別講演会特集号—



【2,300人が小泉さんの話に耳傾ける】

「下村満子の生き方塾」は3月2日、福島県郡山市の郡山市民文化センターに、小泉純一郎・元内閣総理大臣を招き、「日本の歩むべき道」と題した特別講演会を開きました。(株)パスポート、城南信用金庫の協賛、盛和塾福島、郡山信用金庫、福島民友新聞社、自然エネルギー推進会議、エネルギーから経済を考える経営者ネットワークが後援し、市民ら約2,300人が聴講しました。

小泉元総理は、東日本大震災、原発事故を振り返り「首相時代に原発は安全で、安く、クリーン、と信じていたが、全てうそだった」と述べ、「反省の意味も込めて、『原発』ゼロに取り組んでいかなければならない」と力説。原発再稼働に反対し、脱原発を訴えました。小泉元総理は講演の中で、自然エネルギーの可能性などを指摘し「変化に対応する能力は、日本にある。ピンチをチャンスに変え、今よりもいい国造りを進めていくのが、若い人に対する私たちの役目だ」などと話しました。

講演会終了後の記者会見では、「福島の復興は大事だが、同時に災害をどうやって克服していくかを考えていくと、原発ゼロに行き着く。県民が変化に対応し、災害を克服していくと信じている」と述べ、「(原発再稼働に対し) 根強く反対運動を展開していくことが大事だ」と話しました。

(文責・皆川猛)



長蛇の列となった会場待ちの人々

下村塾長の開催挨拶

● 小泉さんは、いま、人生の本番をやっている



2300人の聴衆を前に開会挨拶する下村塾長

「下村満子の生き方塾」がなぜ、小泉純一郎元首相をお呼びして特別講演会を開くことになったかを、まずお話します。3年前だったと思います。総理を辞めた後、小泉さんは表舞台から姿を消していましたが、突然、日本記者クラブで記者会見をしました。この会見には私を含めて300人ほどの記者やジャーナリストが詰めかけたのですが、小泉さんは「原発ゼロ!」「自然エネルギーこそ、日本を立て直す!」と力強く語りました。2011年3月には、東日本大震災によって、福島第一原発では原子炉がメルトダウ

ンするという大事故が起き、事故発生から7年目を迎えようとしている今日でも、収束の目途は立っていません。

この元総理の話が終わった時、感動のあまり、私は思わず立ち上がり拍手しました。私が考えていたことと同じだったからです。この話を数日後に開いた「生き方塾」の定例勉強会で報告し、それから片思いであるけれど、小泉さんに是非とも「生き方塾」で話してもらえないかな、と願っていました。お金もない小さな塾だから、それは高望みだと思っていましたが、思いもかけずにいろいろな方のご縁で、こんな立派な会場で、しかもこれだけの方々においでいただいて講演会を開くことができました。強い夢と意思があれば、思いは必ず実現すると私は信じていますから、遂に実現したと感激しています。

私は小泉さんが総理を長い間務めた偉い人だから、お呼びしたわけではありません。ジャーナリストはへそ曲がりが多いから、「小泉元総理?それがどうした」「元総理だから別に偉いわけじゃない」などと反発するところがあります。私もその一人です。元総理は元々自民党であり、総理時代は、「原発は安全で、安くて、しかもクリーンなエネルギーだ」と、本当に信じていたそうです。だから原発を推進していました。しかし、福島の大事故があり、それで原発は本当に大丈夫なのか、と疑

問を持ったところが、小泉さんの偉いところだと私は思うのです。事故を機に、原発について、徹底的に勉強されたそうです。いろんな本を読んだり、様々な人から話を聞いたところ、自分が総理を務めていたとき聞かされていた原発の話と、原発の実態は全く違うことに気づいたそうです。専門家と称する人たちの話は、全て嘘だと分かった。普通の人ならそこで終わってしまうのですが、小泉さんが凄いのは、自分が総理時代にやっていたことは間違っていた。だからそのことを、国民に対して謙虚に謝って、原発の問題点をはっきりさせなければならない、と立ち上がったことです。見て見ぬふりはしない、頼被りをしないということです。面子ではなく、間違っていたとも思ったらすぐにそれを正して、正しいことをする。それこそが「人の道」、だと小泉さんはおっしゃいます。

私は「生き方塾」では、壊れたレコードのように、いつも「迷ったら、『人として、人間として、何が正しいか』、と原点に帰って考えれば、ほとんどのことに解答は見つかります」と言っています。小泉さんも、間違ったことに気が付いても、頼被りして知らんぷりするのとは人として恥ずかしいことだとおっしゃっています。こうした元総理の姿、変身に対しては、自民党や財界の一部から批判があるのは私も知っていますが、小泉さんはこういった批判は一切気にしないで、全国を行脚して、「原発ゼロこそ正しい」と訴え続けています。しかし、メディアは、私の古巣である朝日新聞も含めて、残念なことに、原発を推進する現政権に逆らうまいと、小泉さんの主張には目をつぶっています。

総理を務めた方は、その国では頂点を極めたと言っているでしょう。その後は優雅に、皆さんにチャホヤされて、一生を終えることができます。しかし、小泉さんは、いくら

批判を浴びようが、間違いを謝りながら原発ゼロ社会、自然エネルギー社会の実現を訴える行脚をし続け、死ぬまでやるつもりだと語っています。私が一番感動しているのは、こうした小泉さんの「生き方」なのです。「生き方塾」の塾生には、小泉さんのこの生き方を見て欲しい、学んで欲しいということが、シャカ力になって小泉さんの特別講演会を開こうと頑張ってきた大きな理由です。

原発に関してはいろいろな意見、考えがあることは十分承知しております。この場にいる方も、色々な意見があると思いますが、色々な意見があることこそが健全な社会であります。色々な意見を聞いて、自問自答しながら、考え抜く。これこそが民主主義社会であり、国家の基本だと思います。ですから、今日の講演会は、原発ゼロの集会ではありません。小泉さんの話に耳を傾け、自問自答して、エネルギー問題を考え、原発に対する考えを確立する場になれば、と思っています。

首相をしていた時の小泉さんが、人生の頂点だったと考える人もいるでしょうが、こうした活動をしている今の小泉さんの姿こそが、私から見れば、人生のハイライトではないのか、と感じてしまいます。うらやましいなあ、と思っています。とにかく小泉さんの話は面白いので、あっという間に講演が終わってしまうでしょう。

本日の特別講演会開催に当たっては、株式会社パスポートや城南信用金庫様から協賛、協力をいただいたほか、また後援という形で私たちを助けてくれた盛和塾福島、福島民友新聞社、郡山信用金庫、自然エネルギー推進会議、エネルギーから経済を考える経営者ネットワーク会議のお蔭で今日の会を開くことができました。この場を借りてお礼申し上げます。とことん「小泉節」を楽しみ、その後真剣に考えましょう。

吉原毅城南信用金庫相談役の挨拶

● 原発ゼロ目指す大きな運動を進めよう



原発ゼロを呼びかける
吉原前城南信金理事長

スコミは知らぬふりをしている」と指摘していました。加藤先生は「だから、私は原発即時ゼロを訴えていく」と打ち明け、「原発ゼロが実現しないうちには死んでも死にきれない。手伝ってほしい」と懇願されました。2013年、加藤先生と私は、一緒に「原発即時ゼロで未来を開く」という本を出しました。世界の動きを見ると、福島を契機に、原発は

止めて自然エネルギーに舵を切っています。しかし、相も変わらず、電力業界初め政府、財界も、世界の流れに逆行するように原発に依存しようとしています。

しかし、底流では、日本でも流れは変わってきています。ドキュメンタリーの映画監督でもある河合博之弁護士は「日本と再生」という映画を作り、先日封切されましたが、この映画を見ると、ドイツ、デンマークなどの国では、積極的に自然エネルギーを採り入れ、原発を1とした場合、風力と太陽光は2となり、自然エネルギーは安くて安全ということが分かります。こうした世界の潮流を一早く予見し、日本も安全で安くしかも無尽蔵の自然エネルギーにシフト換えして、これを経済活性化の柱にしなければならないと主張したのは、小泉純一郎元総理です。

小泉さんは全国を巡って自然エネルギーへの転換を訴え続けるハードなスケジュールをこなし、今日は超満員の方が小泉元総理の話を聞くために訪れてくれました。地域と共に歩む城南信用金庫ですが、原発ゼロ、自然エネルギーは、経済発展の原動力となるわけですから、小泉さんの活動を応援しています。郡山信用金庫の協力をいただきました。今日は超多忙の中、小泉元総理に郡山に来てもらいました。東京と地方が一体となって、原発ゼロ、自然エネルギーを目指す大きな運動を進めていきましょう。

原発ゼロ！自然エネルギーこそ日本の未来を作る



自然エネルギーこそが日本再生の道と説く小泉元総理

小泉純一郎です。本日は寒い中、このような大勢の方がお越しくださいませありがとうございます。下村満子さんの「生き方塾」で講師をしてくださいという話があり、原発ゼロにしなくてはならない、自然エネルギーで日本は十分やっていけるというお気持ちに共感をもったものですから、今日、喜んでやって来た次第です。下村さんから過大な紹介をいただき恐縮しているところです。

今、城南信用金庫の理事長をされた吉原毅さんからお話がありましたが、この原発事故が起こる前は、吉原さんや下村さんとは、全く接点がなかった、と言えるでしょう。しかし、今、お話を聞いて、共通の接点は、慶応大学教授で政府税調の会長を務めた加藤寛先生なのです。下村さん、吉原さん、そして私の三人は、先生の教え子であって弟子みたいな形なのです。加藤先生が私たち3人を引き合わせたのは、と吉原さんの話を聞きながら思いにふけていました。

今年2017年は平成29年、昭和92年です。私が初めて入閣して竹下総理の下、厚生大臣に就いたのは、昭和63年12月でした。年末最後の閣議の時、「何かあった場合は連絡しますから、年末年始休暇は、総理官邸に一時間以内で来られるところでお過ごし下さい」と指示されました。当時、昭和天皇は大きな病気に罹っていました。そして1月7日、朝6時頃でしたか。「昭和天皇が崩御されました。閣議を開くので至急、総理官邸に来て下さい」という連絡がありました。官邸に着くと、当時の石原信夫官房副長官が「直ちに元号を変えなくてはなりません。中国の古典から選んだ次の3点の中から選んでください」と発言し、「修文」「正化」「平成」の3つの候補を示し、各閣

僚の意見を求めました。石原さんは各候補の由来を説明しましたが、「平成」は『書経』に出てくる「地平天成＝ちたいらかに、てんなる」が由来で、「国の内外、天地とも平和が達成される」という意味で、そのような祈りを込めている、と説明し、「これでいかがでしょうか」と言いました。すると竹下首相以下全閣僚は、ただうなずくだけで、全く異論は出ませんでした。それだけで新しい元号は「平成」に決まったのです。ただし、官房長官が新元号を発表しますから、それまではこの閣議室を出ないでください、と釘を刺されました。口が堅い政治家は滅多にいないからでしょうね。皆さんも覚えているでしょう。小淵官房長官が「平成」と墨書された紙を掲げたことを。

ところが平成になってからは、「国の内外、天地とも平和が達成される」という祈りとは逆に、いろんなことが起きています。1989年の昭和64年は、たった1週間しかなく、1月8日から平成です。この年の11月にはベルリンの壁が崩壊し、これが引き金になってソ連はじめ旧共産圏の一角独裁体制が崩れ、ロシアが誕生しました。しばらくして阪神大震災、オウム真理教の地下鉄サリン事件、中越沖地震、そして2001年9月にはニューヨーク貿易センターへの旅客機突っ込みテロによって、数千人の方が亡くなりました。その後はイラク戦争、アフガン戦争と続き、6年前の2011年3月11日午後2時46分に東日本大震災。地震、津波のほかに福島原発のメルトダウンとなって、今日に至っている。

今は内外激動、混乱の時代です。6年前、私は連日、地震、津波、原発事故の報道を見ている中で、「ああ、俺は

総理の時、原発は必要だ」と言っていたな、と振り返りました。反対の声はありましたが、資源が乏しくエネルギーの90%以上を、高い値段で輸入している日本では、原発は必要だと思っていました。専門家に聞いても、「日本の原発は安全だし、発電コストはほかの電源に比べて圧倒的に安い。二酸化炭素を出さないグリーンエネルギーだ」という話を信じて、原発反対論者の意見を聞きませんでした。しかし、事故後の福島原発の映像を見て、疑問を持ち始めました。ひょっとしたら、俺は原発の推進論者のウソに騙されていたのではないかな、と。私は総理を引退し衆院議

員も辞めていましたから、時間はたっぷりありました。それから反対論者の話を聞き、原発の危険性を説いている本などを、片っ端から読み漁りました。原発導入の経過、推進論者の言っていること、反対論者の言っていることなど、自分なりに勉強しました。私は時代小説が好きですから、それまでは時代小説ばかりを読んでいましたから、それを一時休んで、勉強していたら、推進論者が言っている「安全」「安い」「グリーン」は全部ウソだと分かりました。こういうウソを、私はよく信じていたな、と悔しくてしょうがなかった。

● 過ちを改むるに憚ることなかれ

総理を辞めたら政治に口を出してはいかん、黙って静かにしているのがいいのだ、という考えを持っていましたから、原発推進論はウソだと気づいても、黙ってしようかとも思っていました。しかし、あの深刻で悲惨な状況を見たら、俺は間違っていたと、誤りを認めやり直さなければいけない、と覚悟を決めました。

「過（あやま）ちて改めざる、是を過ちという。過ちては改むるに憚（はばか）ること勿（なか）れ」、という言葉思い出しました。こうして過ちを反省して、全国を回って原発ゼロを訴えようとしたわけです。

最初は、「原発は減らして電源としての依存度を小さくしなければ」、と講演をしていましたが、2013年のことだったと思います。講演する際には、今世界でたった一つしかなく、建設中の原子力発電で出てくる核廃棄物、ゴミ処分所の実態を見る必要があると思って、フィンランドのオンカロを訪ねました。日本には核廃棄物の処分場は一つもありませんよ。オンカロとは地名ではなく、フィンランド語では、「洞窟」、「隠れ家」といったような意味ですが、核

廃棄物の処分場の代名詞になっています。フィンランドは硬い岩盤でできている国で、オンカロがある島も全島岩盤でできています。

当時は経団連のシンクタンクの顧問を務めていましたら、1週間の予定で、オンカロ視察に行かないかと呼びかけたところ、面白いことに東芝、三菱重工業、日立といった原発建設大企業の重役や社長が参加しました。福島原発事故の後、原発ゼロ宣言して、太陽光、風力、バイオマスといった自然エネルギー普及に全力を挙げているドイツを見学した後、フィンランドに向かいました。

オンカロを建設している島は本土からフェリーに15分ほど揺られた洋上にありました。処分場は岩盤を地下400mほど掘削して、2*4四方の広場を作り、核廃棄物を入れた頑丈で大きな何百本の円筒を、鉄やコンクリートを用いて岩盤に埋め込みます。全部埋めても原発2基分しかないということです。フィンランドにはもう2基原発があるのですが、反対があって残り2基分の手当てはできていません。

しかも、オンカロの建設に当たり、フィンランド国会は、オンカロには外国の核のごみは入れない、という前提で、建設を認めています。現地では案内者に「もうできているのですね」と聞くと、案内者は「壁を見てくれ。湿っているだろう。あの湿気が5万年、10万年後には水になって埋設した核廃棄物容器を侵さないか心配だ。ゴミが漏れないと立証できれば、審査は通りこの処分場は完成する」と説明しました。ただ、湿気が残っているために審査が終わっていない。これと同じものを日本で作ろうとしてもまず、無理だろうと思いました。フィンランドは地震がほとんどありませんが、日本は地震が多い、火山も多い、地下水が豊富で、400mも掘れば、温泉が湧く国です。

さらにこの核のごみ処分場は安全になるまで、10年以上もの年月が必要です。安全になるまでは絶対に掘り返してはいけません、近づくこともできません。放射能は目に見えないし、匂いもしません。



間違いに気付いたら直ちに訂正することが大事と訴える小泉元総理

● 10万年先の言葉をどう書くのか

地上に出た時、案内人は笑いながら、もう一つ問題があるのです、と言います。「それは何?」、と聞くと、核廃棄物の怖さをどうやって、1万年先、10万年先の人間に教えられるのか、ということ。人間は好奇心旺盛な動物だから、駄目だと言われると余計に見たくなったり知りたくなります。どうすれば1万年先、10万年先の人間に、「ここはこういうものが埋まっているから、掘ってはいけません。触ってはいけません」と、知らせることができるか。どんな言語

で書くべきなのか。これも頭痛の種だということです。1万年後にどんな言語が使われているか、想像できません。万葉集や源氏物語だってしっかり勉強しなければ、現代人には分かりません。それが1万年、10万年という長い時間ですから、危険性を何語で書くのか、半分冗談でしたが、悩むのも当然です。言葉は生きています。昔は、頭が切れる人と言えば頭がいい人でしたが、今は頭が変な人になり、ヤバいは危険という意味だったのが、今はおいしい、素晴らしい



満杯となった郡山市民文化センターの大ホール

しいという意味で若い人が使っている。言葉は変わるから、ややこしいのです。

いずれにしても核廃棄物は千年、万年、10万年先までも危険な物なのです。この危険な物を処分する場所、ゴミ捨て場を、日本は国内に設置しなければならないのです。福島原発事故まで、国内では54基の原発が動いていましたから、そのゴミは膨大なのに、処分場がどこにもありません。これを考えても、日本ではもう原発は無理だなあ、と私は思いました。オンカロの帰り、一緒に行った東芝、三菱、日立の面々に「原発は無理だね」と言ったら、彼らは「小泉さん、そんなこと言わないで下さいよ。小泉さんが原発はやはり必要だ、と言ってくれると、我々はいいいんですけどね」と言いました。

いかに親しくても、それは無理な相談です。オンカロから帰った後は、前より以上に「日本では原発は絶対無理だ」という考えが深まり、発言しています。それで3年前の都知事選では、原発ゼロを掲げた細川護熙さんを応援しました。都知事選の前に溯ります。新聞で私が原発ゼロを主張していることが記事になり、知り合いは原発ゼロを喜ぶ人と喜ばない人に分かれたましたが、喜んだ人の方が多かったと思います。細川さんも私と同じように、原発ゼロを考えていました。そこで原発ゼロを政策の柱にする若い人が選挙に出れば、原発ゼロ運動は弾みがつくと、人選したのですが、断られたりして、適任者は見つかりません。それで結局、細川さんが「それじゃ、仕方ない。小泉さんが応援してくれるなら、俺が出るか」と2014年1月、都知事に立候補しました。

最初は街頭演説に一回ぐらい出ればいいかと思っていましたが、雪が舞ったり雨が降ったり寒い1月、2月にもかかわらず、初日から最終日まで想像もできないくらいの聴衆が集まりました。原発ゼロの話をじっくり熱心に聞いてくれるから、こちらも長い演説を打ちます。自分の選挙でもこれほど熱い聴衆はいませんでした。一方、舛添さんの方は閑散としていたから、勝ったと思いました。だけど、結果はそうではなかった。

● 原発ゼロでやっていける日本

皆さん、よく考えてください。2011年3月の福島原発メルトダウンから13年9月まで稼働していた原発はたったの2基で、13年10月から15年9月までは原発ゼロでした。そして15年10月から今日までは再稼働があっ

都知事選の後、3月頃だったかな。「小泉は原発ゼロの激しい演説をしている」という話が、経団連の中で話題になりました。経団連のシンクタンク顧問をしていたことは話しましたが、あるメンバーから「小泉さん、都知事選も終わったのだから、原発ゼロ発言を控えませんか。ここのシンクタンクの顧問も務めていらっしゃるのだから」と言われました。私は自分の考えを変えるつもりはないし、迷惑なら顧問を辞めます、と言って辞めたところで、吉原さんと出会いました。

実は加藤寛先生が城南信金のシンクタンクの所長をしていたのですが、亡くなられていました。吉原さんの話にもありましたが、加藤先生は亡くなる直前に「原発即時ゼロで未来を開く」という本を出していました。吉原さんから「加藤寛先生が亡くなった今、このシンクタンクの名誉顧問をして欲しい」と懇願されて、加藤先生の後なら、ということで吉原さんと一緒に活動しているわけです。

ともかく、原発は安全だ、と日本の専門家は言っていました。1979年にアメリカのスリーマイル島原発では、核燃料がメルトダウンし、1986年には旧ソ連のチェルノブイリ原発でもメルトダウンしました。チェルノブイリの事故の時も専門家は「日本はスリーマイルやチェルノブイリとは違う。日本は絶対に安全です」と言っていました。

自民党幹事長を務めた中川秀直さんは、幹事長に就く前に科技庁長官を経験し、科技庁長官時代は原発を推進してきましたが、「引退してから原発を勉強すると、小泉さんと同じ結論に達しました」と話し、今日も一緒に来てくれました。かつて自民党幹事長をしていた人が原発ゼロ運動をしているのだから、この運動は野党の特売特許ではないよ、保守勢力も堂々とやるべきだと思うのです。

私が「直ちに原発ゼロにしなくてははいけない」と言ったら、財界のある重鎮が「小泉さん、無責任のことを言わないでください。原発は日本の電源の30%も占めています、将来ゼロならともかく、3、4か月ならゼロでもいいでしょう。原発がなくなったら、日本の経済はやっていけないし、停電になれば冷暖房は停止し、生活もやっていけません。考え直してください」とクレームを付けてきました。

たから2、3基動いています。つまりこの6年間、日本は実質的に原発ゼロでやってこれたのです。たしかに停電はありましたが、それは台風などによって送電線が切れたからであり、発電量が足りなくなって停電したわけではあり

ません。日本は原発ゼロでやっていけることは実証されているのです。推進論者は、太陽光、風力などの自然エネルギーは総発電量の2%しかないではないか。太陽光は日が陰れば駄目、風力は風が止まればだめ、などと言い、「電源の30%を占めている原発と2%しかない自然エネルギーを比較すること自体おかしい」と言います。今原発は2基動いていますが、その発電量は自然エネルギーの発電総量より少ないのです。繰り返しですが、日本は原発ゼロで十分やっていけるのです。

ドイツは福島事故以来、与野党ともに原発ゼロ宣言をし、現在も数基がまだ動いていますが、太陽光、風力、家畜のふんを素にしたバイオマスなど、自然エネルギー発電を加速していますが、日本は原発ゼロでやっているのですから大したものですよ。ドイツのほか、スペインやデンマークも自然エネルギーが原発に取って代わろうとしているし、アイスランドは地熱で全てを賄おうとしています。原発推進論派が妨害せず、政府が奨励すれば、日本は30年もかからないで、自然エネルギーが、原発が供給していた電源に代わります。既に太陽光だけで、原発10基分の電力を供給しているのですから。本気で政府が、原発ゼロ、自然エネルギー推進を打ち出せば、自然エネルギーが30年もかからないで、10年で電源の30%を占める原発に取って代わると思いますが、確信しています。

推進論者は、原発はコストが安い、と強調します。経産省が最近また、原発は自然エネルギーより安いと発表しましたね。しかし、原発を造るには、電源三法という法律があって、電力会社から税金を徴収し、その税収を原発立地に同意した自治体に交付金として払います。しかし、その税金は発電コストに入っていません。しかも電力会社は、原発はコストが安いと言いながらも、自社で損害賠償もできません。東電は避難を余儀なくされた住民への補償もできないし、除染費用も払えないから、2011年、政府に「支援してくれ」と泣きつき、政府も電力会社がなくなれば困るからと、5兆円を上限に国庫から支援することにしましたが、3年後には「5兆円では足りないからもっと下さい」と頼み込み、国も「それじゃ9兆円へ引き上げましょう」と返事しましたが、昨年には「まだ足りない」と言い、廃炉にどれほどかかるか分かりません。もっと支援してくださいと繰り返すばかりです。これも発電コストには入っていません。原発は本当に「金食い虫」ですよ。

30年前に福井県に「もんじゅ」という原子炉ができました。3人寄れば「文殊の知恵」ですから、名前はいいですよ。夢の原子炉とも呼ばれました。原発で燃やした核燃



一言も聞き漏らすまいと聞き入る聴衆

料をこの原子炉でうまく使えば、エネルギーになって、しかも新たな核燃料を作るといっわけですから、永遠にエネルギーとして使えるという触れ込みでした。もんじゅ建設に取り組んだのは1985年で、10年で完成しました。しかし、すぐに事故を起こして駄目。その後も事故やトラブル、故障、人為的ミスが数えきれないほど続き、本格稼働することはありませんでした。そして昨年とうとう、原子力規制委員会は「もんじゅ」で働く職員や研究者は怠慢だ、として現行体制での運営は無理、「文殊の知恵」は出てこないと宣言しました。にもかかわらず、政府はまたこの幻の原子炉をやるようとしているのです。廃炉にしたいけど、もう少し研究したいなど、ごちゃごちゃやっていますよ。ゴミが永遠のエネルギーになるはずの「もんじゅ」は300人寄っても、3000人寄っても知恵が出ない。結局廃炉になって、この間注いだ税金は1兆1億円。1兆円というお金はとても大きいですよ。福島県の予算だって1兆円はないでしょう。

1兆1千億円かけて夢の原子炉は幻の原子炉になり、今でも動いていないのに、1日500万円かかる無駄をしている。なのに、またしてもやろうとしている。私にはまったく理解できません。分からないのはもっとあります。責任の所在が分からない。この無責任体制は、福島メルトダウンでも言えます。事故は東電の責任なのか、国の責任なのか、もやもやしたままで、事故の検証もできていない。国会も黒川博士を座長にして、事故調査委員会を設けて調査しましたが、結論は「福島メルトダウンは、地震や津波といった天災が原因という話もあるが、決して天災ではなく人災である。なぜ人災かというところ、安全対策を疎かにしたからである。東電の安全対策には不備な点があるとの指摘があったが、そのような指摘に応じていたら経費が掛かり過ぎて、経営負担になる、採算が取れないとの意見で切り捨てられた。経営者の怠慢だ。これが人災の根拠だ」というものでした。チェルノブイリの原発事故の後、当時の科技庁の原子力局長は「日本の原発はチェルノブイリとは違う。メルトダウンしても多重防護しているから、放射能漏れは起こしません。周辺の住民は避難する必要はありません」と言っていました。

40年経った原発は劣化して事故を起こしやすくなるので、40年を目途に廃炉にするのが原子力政策の柱でした。ところが最近、60年まで運転を認めようという動きが出ています。原発の増設や新設は住民の反対もあるから、容易にできない。てっとり早く原発で利益を上げるには、例外を設けて、耐用期限を引き延ばせばいいという考えから、2、3基をそれに当てはめようとしています。福島メルトダウン以降、原子力規制委員会は新しい規制基準を作り、昨年九電は、新規規制基準に応じた2基の再稼働を申請しました。原子力規制委員長は「審査はパスしました。ただし安全とは申し上げません」と言いました。すると政府は、「日本は世界一厳しい規制基準を持っています」と豪語しました。世界一厳しいなら、アメリカの規制基準と比較してほしい。アメリカは、事故を想定した周辺の自治体も含んだ避難経路、避難計画を示さなければ許可しません。アメリカでは9・11テロを想定した避難計画も考えなければなりません。原発は放射能の塊りですから、飛行機が突っ込み破壊されたら、その結果は言うまでもありません。死の灰が播き散らかします。アメリカでは原発の周辺を軍隊が警備しています。ところが日本で

は、周辺自治体に避難計画はありませんし、住民にも知らせていません。さらに原発を警護する自衛隊や警察も置いていないでしょう。「日本は世界一安全な原発だ」など、よくそんなことを言えたなと思いましたよ。現行制度では、青森だったら、青森の原発立地自治体の OK を取ればいいのですから、函館の市長が怒るのも当然です。30*。圏内なのに、全然説

明に来ない。函館市議会の全員が「避難計画は、法律があるから電力会社が勝手に作るのに、電力会社は説明に来ない。全くけしからん」と不満を爆発させるのもこれまた当然です。こういった状況なのに、原発は安全ですと、よくもひどいウソをつけるなあ、とため息が出てきます。どこに責任があるのか分からない。

● 環境破壊産業の原発



記者会見に応じる小泉元総理

原発は、二酸化炭素を出さない、環境に優しいクリーンエネルギーというけれども、発電している時はウラン燃料が核分裂してるから二酸化炭素はたしかに出さない。ところが原発を造る際には、膨大な鉄、生コン、各種金属を使い、これらの資材は二酸化炭素を出さないでは作れません。それに原発は海水を原子炉の冷却に使うから、海岸部に立地し、冷却に使った海水は温排水として海に流し出します。この温排水によって海の生態系は壊れています。水温が一度違うだけでダメージを受ける水中生物は少なくありません。つまり原発は環境破壊産業なのです。

こういった害が分かっても推進を止めようとしません。事故後は、電源の原発依存度をできる限り下げなければいけない、と言っていたのに、どんなに金がかかっても原発は、10%程度は維持しようという空気に代わってきています。原発に生涯をかけた人や、原発で働いている人の気持ちは分かります。原発の電気の恩恵を受けている私たちの世代は、まだいいかもしれませんが、原発稼働に伴う何兆円、何十兆円もの負担は、若い世代、まだ生まれていない何千年、何万年後の世代が背負うのです。

原発に携わる電力会社の人たちは皆、頭がいい賢い人ばかりです。そんな人たちが、福島メルトダウン以後6年間、実質原発ゼロでやってきて、しかも電気が余っている単純な事実をどうして分からないのか。学業優秀な人を信用できなくなりましたね。不思議ですね。

最近、どこかのサイトが、原発ゼロは30年代にできる、と書いていたけれど、今すぐできる。だって現実にやっているのだから。日本は太陽光にしても風力にしても、先進国よりはるかに遅れています。アメリカはどうか。アメリカは油があり、シェールガスもある。そういうアメリカでさえも、今高速道路で発電ができないかと実験を始めました。もし日本でそれができるなら、高速道路はずいぶん走っているから、高速道路が一大発電所になりますね。道路にピエゾ電気デバイスを埋め込み、道路の表面を移動する

自動車の振動で発電しようというものです。

日本は太陽ばかりなく風力あるし、地熱も水力もあります。バイオマスもあれば森林のチップもある。無限にある様々な自然エネルギーを使えば、日本はもう、外国での資源獲得競争に加わることはなくなります。危険な原発なしで、自然エネルギーで発展できる社会を作上げることができます。こうした国づくりこそが、日本の進むべき道だと私は確信しているのです。だからこれだけ熱心に原発ゼロ運動をできる。

ピンチはチャンスという言葉があります。日本ほどピンチをチャンスにしてきた国はないかと思います。また、私も含めて、考えもよく変わる。総理の時は、原発は必要だ言っていたけれど、今は要らないと言っている。ブレない小泉と言うけれど、「小泉さん、随分ブレたではないか」と批判されているけれど、いい方向にブレるなら許されません。過去の歴史を見てみると、日本は個人ばかりでなく、国家もブレています。カラッと変わっています。まず明治維新。薩摩長州は、幕府に対して開国したのはけしからん、尊王攘夷だと言って徳川幕府を倒しました。ところが薩摩は政権を取ったら早速開国です。ちょん髷を切って土農工商をなくし、廃刀令を出して、300諸藩を都道府県に変えてしまった。見事な転換ですよ。

ところで、福島というと、すぐ会津を思い浮かべます。幕末から明治維新にかけて、会津ほど悲惨な目に遭ったところはありません。徳川幕府に一番忠誠を誓ったのに、一夜にして官軍から「賊軍」の汚名を着せられました。藩主の松平容保はじめ会津藩士や白虎隊は、悲惨な状況でした。わけがわからないまま、「なんで俺たちが賊軍なのだ」と悲惨な運命を味わったにもかかわらず、あの明治維新以降、不屈の精神をもって立ち上がってきました。

私は最近になって会津の歴史書を読むようになりましたが、面白い言葉に出会いました。会津の「三泣き」です。昔のことですよ。一つは会津に転勤を命じられた人は、どうしてあんな雪深い田舎に行くのだ。行きたくないと言って泣く。二つ目は、会津に赴任して土地の人たちの優しさや深い人情に触れて泣く。数年たって友達もでき、地域となじんで暮らしている時、会津から戻れという辞令をもらい、「こんな会津を離れたくない」と言って、三回目の泣きです。

日本人はこういう凄まじい困難に遭っても、不屈の精神をもって立ち上がるのです。今日は、会津電力の佐藤弥右衛門社長がお見えになっていますが、佐藤さんは自然エネルギーで会津はもとより、福島を発展させようと、震災から二年後に会社をつくりました。会津には佐藤さんのような人たちがたくさんいます。

●ピンチをチャンスに変える

日本人は困難、試練に直面した時、不屈の精神で立ち上がります。明治維新ばかりではありません。あの第二次世界大戦。猪瀬直樹さんが、30年前の作家の時代、「昭和16年 夏の敗戦」という本を書きました。なぜ「昭和20年夏の敗戦」ではないのか。この本の結論だけ言います。昭和16年4月、近衛文麿首相は閣議決定し、「日本総力戦研究所」という名のシンクタンクを設け、研究テーマは、「今アメリカと戦争したら、日本はどうなるか」。30人ほどの優秀な官僚、ジャーナリスト、学者たちを集め、研究させました。それから4カ月後の8月、全閣僚の前で研究結果を報告しました。その内容は「現時点でアメリカと戦争すれば、必ず負ける」というものでした。しかし、「机上の空論だ」と退けられ、12月8日、日米開戦となったのです。結果は予想通り、日本の完敗です。東京大空襲はじめ各地で空襲に見舞われ、広島長崎の原爆投下です。この戦争では、300万人以上が命を落としました。

しかし、日本人はあの敗戦に屈しませんでした。不屈の精神をもって先輩たちは立ち上がって、最大の敵であったアメリカを味方にしてしまい、繁栄を続けてきました。昭和の初め、アメリカやイギリスなど第二次大戦では連合国となる国々は、日本に対して「満州国から撤退せよ」と迫り、日本は「満州国は、多くの犠牲でうち立てた国であり、日本の生命線だから撤退できない」と拒否し、これが導火線となって大戦に突入しました。敗戦で、日本は満州、台湾、朝鮮半島を失いましたが、失った後の方がはるかに発展したではありませんか。

原発を失ったら日本は発展できない。そんなこと全くありませんよ。原発がなくても十分、自然エネルギーでやっていけることは、この6年間で証明されました。さらに、これからは太陽光、風力で世界に遅れないように進めていけば、日本は、原発依存の30%の電力は30年もかからないで、自然エネルギーだけでやっていけます。

私が衆院議員に初当選した1972年の翌年、1973年に戦後最大の経済混乱である石油ショックが起きました。この年、アラブ諸国とイスラエルが戦う第四次中東戦争が起き、これを契機に産油国は原油輸出を大幅に減らしました。戦争前の原油価格は1バレルあたり2ドル前後でしたが、戦争が始まると一挙に10ドルに跳ね上がりました。その頃日本のエネルギーの7割は輸入原油に頼り、様々な工業製品は油がなければ製造できないから、パニックになりました。なぜパニックを招いたのか。その当時から油は永遠にはない資源だ、代替エネルギーや省エネ技術の開発をしなければいけない、などと言われていましたが、1バレル2ドルの安値の時は、脱石油に投資することはありませんでした。しかし、原油の値段が5倍になったから、大混乱

になりました。いずれ1バレル50ドル、100ドル時代がくるのではないかと堺屋太一さんは予言していました。「油断」。油を断たれるとこういう事態になるぞ、と書いたこの本は、大ベストセラーになりましたね。しかし、数年前、1バレル150ドルになった時、ガソリンスタンドには大行列ができるぞ、またしても大混乱するぞ、といわれましたが、そんなことは全くありませんでした。なぜか。40数年前のことが教訓となって、いかにして石油依存度を下げるかに取り組んだ結果、依存度は70%から40%に下がっていたからです。

オイルショック時の狂乱物価には、二つの原因がありました。一つ目は、金さえあれば原油は買えるから備蓄をしなかったこと、二つ目は、省エネ技術開発をしなかったことです。こうした省エネ技術の開発が1バレル150ドルでも動揺しない社会の基礎になったのです。あの石油ショックのお蔭で、日本は環境先進国になったと言えるでしょう。省エネが進み、車の排ガス規制は世界一です。

今でも続いている先進国首脳会議サミット発足の経緯は、こうなります。産油国は、石油をがぶ飲みしているアメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、イタリア、日本など先進国が繁栄し、原料を提供する我々が貧しいのはおかしい。原油を武器にして先進国に対抗しよう、と主張し、減産などの行動に移しました。それに対抗して、サミットが開催されるようになったのです。サミットが発足してから、産油国は勝手に油の値段を上げられなくなったでしょう。油の値段が上がれば、省エネ技術や代替エネルギーの開発につながるからです。石油ショックと脱石油も、ピンチをチャンスに変えてきた好例です。災害を受けた方には申し訳ないのですが、東日本大震災という戦後の大ピンチがきっかけとなって、自然エネルギーによる国づくりが進めば、大ピンチを大チャンスに変えた格好の手本になります。日本がエネルギー獲得競争に加わることなく、原発ゼロ、無限にある様々な自然エネルギーを使った国に転換するのが私の考えなのです。

「少年よ 大志を抱け」というクラーク博士の名言を思い出します。「ボーイズ ビー アムビシャス」。アムビシャスを野心ではなく、大志と、上手く訳したと思いますよ。「少年よ 野心的であれ」ではなく「大志を抱け」。日本語として実にしっくりします。私も後期高齢者になりましたが、大志を抱くのは少年だけとは限りません。年寄りになっても、後期高齢者になっても、大志を抱くのはいいと思います。大志—原発ゼロもやればできるのです！「やればできるは、魔法の合言葉」という高校野球に出場した学校の校歌でしたが、原発ゼロもやればできますよ。何度も言っていますが、この6年間で実証しています。日本人は変化に強いのです。

●変化対応能力に長ける日本人だからこそ

今、50代以上の方は覚えていると思うけれど、1971年までドルは360円でした。その1971年に、固定相場制から変動相場制になり、日々対ドル相場は変わるようになりました。初めのころ経済界は、変動相場制に対して、面倒くさい、煩雑だ、と不平たらたらでした。ところがそれから40数十年。固定相場に戻る国は世界中どの国もあ

りません。日本も変動相場になれちゃいました。

当時ドルが300円になる、250円なる、200円になったら日本経済は壊滅すると言った人は結構多くいましたが、今1ドルは110円から120円ですね。ところが壊滅はしていないし、1ドルは100円ぐらいがいい、という経営者が多い。日本人は環境に順応するのが得意なのです。

環境の変化を敏感に察知し、それに即して対応する。開国は駄目と言っていたけれど、開国して発展する。アメリカは最大の敵と言っていて、アメリカを最大の友とする。油がなければやっていけない、と言っていたものが、油がなくてもやっていけないではないか、と変えていく。日本人は、このように変化に対応する能力が極めて優れていると思う。

人間は変わるものです。十数年前、日本で一番おいしい料理は寿司だ、と誰が考えたでしょうか。今、世界の人と言うには、日本で一番おいしい料理は天ぷらでもすき焼きでも焼き鳥でもなく、寿司ですよ。当時、欧米人は、ナマの魚は食べません、ワサビは辛いから食べない、パンを食べるからお米は駄目です、とんでもない話です。寿司は全世界の五大陸で一番人気のある日本食として定着している。マグロの美味しさが分かったから、トロは今や世界語になって、外国人が来ると、トロばかり注文するので、すぐネタがなくなってしまい、日本人の常連客が口にできないと、寿司屋がこぼす程です。考えは変わるのです。だれもこんな事態を想像しなかったでしょう。

まだまだ日本には、世界に発信できる文化や生活スタイルがたくさん残っています。日本人はピンチをチャンスに変えられる民族性を持っており、この特性を生かしていかなければなりませんね。

大河ドラマを見て、よく「明治は良かったな」と言う後期高齢者がいますが、私はそうは思いません。明治時代には偉大な人たちがいましたが、40数年の歴史は、戦争の歴史でした。明治維新の薩長対佐幕派が戦った戊辰戦争では、日本人同士が戦って数万人が命を落とし、ようやく発足した明治新政府では、幕末の薩摩の英雄、西郷隆盛と大久保利通が反目して明治10年に西南戦争へと続き、西郷は自決しました。翌11年には西郷を破った大久保が暗殺されます。ようやく新政府が確立した明治27年には大国・清と戦って勝利し、10年後の37年には世界の強国・ロシアと戦い、大多数の予想とは逆に奇跡的にロシアに勝利しました。

明治の40数年間は、このように、戦争の連続でした。4000万人の島国日本が勝てたのは、指導者が立派だったこともあるでしょうが、民衆にとっては苦しい時代だったと思いますよ。年金はもとより医療保険、生活保護などの社会保障はなかった。それでよくあの悲惨な戦争をしていましたよね。しかし、こういった苦しさ、悲惨さを乗り越えて、先人は今日の繁栄の基礎を作ったわけです。だから日本人は、今直面している大災害というピンチをチャンス

に変えようとする意欲を持って進まなければいけないと思います。悲惨の連続だった先人たちに比べれば、私たちはまだ恵まれています。今よりもいい国をつくるのが、我々のように長生きした者の使命であると同時に、これからの日本を支える若い人に対する我々の役目だと思うのです。

政治家の中で、この人の記録は破れないだろうという人がいます。それは尾崎幸雄、尾崎弉堂です。この弉堂は、明治23年1890年の第一回総選挙に33歳で出馬して初当選、以来明治、大正、昭和の各時代、昭和26年95歳で死去するまで、大選挙区、中選挙区、小選挙区を連続25回勝ち抜き、当選しました。私は連続12回当選で引退です。尾崎さんの25回に並ぶには、あと13回選挙するのですから気の遠くなる話です。

彼は戦前、日本は戦争をすべきでないと主張していたから、「憲政の神様」と呼ばれ、亡くなった後、「尾崎記念会館」、今は名称が憲政記念館に変わっていますが、国会近くに建てられています。その記念館前には、彼の揮毫が石碑に刻まれており、その言葉は「人生の本舞台は、常に将来にあり」です。94歳でこの言葉を残しているのですよ。自分が役に立つかもしれない場所は、将来にあり。亡くなる年にこう言ったのですよ。普通90歳過ぎれば、世の中どうでもいいでしょう。しかし、この言葉には、またいつか、自分が必要とされる時が来るかもしれない、それに備えて自分の能力を少しでも高めようという向上心をもって、死ぬまで頑張ろうという意味だと、私は受け止めています。

向上心を忘れてはいけないと思いますよ。私だって、総理を辞めてから、よもや原発ゼロ運動を展開するとは思っていませんでした。不思議なものだなあ、何でこうした運動を俺はやっているのだろう、と思うことがありますよ。ブレない、ブレない、と言われたけど、結構ブレていると思いますよ。でもね、尾崎幸雄氏の「人生の本舞台は常に将来にあり」。自分が亡くなる年にこう言えるか。常に向上心を持つことは、老いも若きも男も女も、大事なことだと思っています。

みなさん！ 今日ここに94歳の人は一人もいないでしょう。どうか、これからの日本、ピンチに屈せず、ピンチをチャンスに変える。少しでも世の中に役立とうと向上心を持って、原発をなくして、自然環境を大事にして、無限にある自然エネルギーを使って、日本が無限に発展していくような国づくりを皆さんと一緒に進めたいと思います。長時間の清聴、誠にありがとうございます。

● 3.11 広野町で鎮魂の祈り

東日本大震災があった3月11日、福島県いわき市広野町は、「ふるさと復興 再生への祈り」を開きました。

「下村満子の生き方塾」は、この企画を後援し、当日は下村塾長、三田公美子事務局長、皆川猛、千葉誠塾生、長沼美江事務局員が参加しました。震災があった午後2時46分、2人死亡、1人不明となった海岸部で鎮魂の黙とうを捧げた後、中央体育館で祈りの音楽イベントを開き、下村塾長は曹洞宗後堂老師の前川睦生さんと対談しました。下村塾長は『「生き方塾」は、震災の翌年から毎年、被災地の海岸で「祈りの集い」を行い、鎮魂と福島の再生を祈ってきた。強い心からの祈りは、波動となって全世界に伝わる。これは科学者も証明している』などと話しました。



3.11 祈りの集いで鎮魂を祈る下村塾長= 3月11日午後2時46分、広野町